

「記憶をつなぐ」佐佐木定綱

戦後七〇年である。七〇年という節目で言われることのひとつは、戦争体験を語り継ぐ人が少なくなっていることだ。当時二〇歳だとしたら現在九〇歳。長い月日を感じさせる。

語り継ぐ人が少ないと、若い世代は必然的に戦争についての意見を持ちにくい。原爆、終戦の日がいつなのかすら知らない人も多い。

記憶を伝えるのはかくも難しい。先日見たNHKスペシャル『あの日の映像』と生きる』でも同じことを深く考えさせられた。特集は東日本大震災のもので、震災時に多くの映像が残されたという点をあげ、その映像を撮影した人、映っていた人や、その家族たちの四年間を追う、というものだった。

映像の情報量というのはやはりすさまじく、たまたま見ていた私も、壮絶な震災の映像にいつの間にか身震いしていた。その特集で一番印象に残ったのは、人々の記憶を風化させてはいけないという強い意志だった。家族が流されてしまい、生き残った男性はそのときの映像を見るのを拒んできただが、今は繰り返し見るという。その理由は忘れてきてしまっていることが怖いからだという。

人は忘れる生きものである。忘れるることは救いでもあり、絶望もある。忘れないこともあれば、忘れたく

ないのに忘れてしまうこともある。

人の記憶はエッセンスだけを残すものらしい。角張った石が川に流されていくうちに角が取れて丸くなるように、ありのままの記憶は時間が過ぎるうちに情報をそぎ落とし、重要なと思われるエッセンスだけになる。これは手に入れた情報を汎用化させるためのプロセスであるらしい。

人は多くを記憶できない。そのエッセンスという点では短歌は非常に適した形式なのではないだろうか。すぐ前の戦争とその次に来し大戦などと今なら言へるが

・戦中派と呼ばれる世代も大凡は世を去りゆきて後のしづけさ

・空襲下火を吐きゐたる新宿のビルに昨今若者集ふ

・六十年安保の年に読みにける『きけわだつみのこえ』の昭和よ

角川「短歌」六月号の特集「昭和九〇年」から四首。「今なら

言へるが」と歴史の一コマとして客観視していることに気づかされる。時間を経て、戦争という記憶は出来事という知識の一つになっている。「戦中派は去り、若者は空襲に遭ったビルに集まる。知識だけではない、血肉を持つた記憶として風化させないためには『きけわだつみのこえ』のようにより本質的なものが必要である。レトリックや知識だけではない、本質的なものこそが人の記憶に深く残り続けるのではないだろうか。

記憶と短歌の関係を改めて深く考えた。

尾崎左永子

清水房雄

岡井隆

伊藤一彦